様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 21 年 6 月 30 日現在

研究種目：基盤研究（B）
研究期間：2005～2008
課題番号：１７４０１０１０
研究課題名（和文）　中国“北宋官窯”青磁の研究

研究課題名（英文）　Study of Celadon Ware by “Northern Sung Guan Yao”

研究代表者
伊藤　郁太郎
財団法人大阪市美術振興協会・大阪市立東洋陶磁美術館・学芸顧問（名誉館長）
研究者番号　40373518

研究成果の概要：
中国河南省汝州張公巷窯が、中国陶磁史上の課題の一つ「北宋官窯」と同定可能か否かが国際的な関心を呼んでいる。窯址の発掘調査が予定通り進行せず、考古学的な実証が得られない中で、本研究はこれまでの限られた出土資料と汝窯、南宋官窯、高麗青磁など関係資料との造形様式の比較検討という美術史的研究方法により同定作業を進めてきた。最終結論は出せないものの両者同定の可能性を裏付ける有力な傍証の一つとして国際的な評価を得つつある。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
17 年度	2,100,000	0	2,100,000
18 年度	1,700,000	0	1,700,000
19 年度	1,700,000	510,000	2,210,000
20 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
総　計	6,600,000	840,000	7,440,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：美学・美術史
キーワード：北宋　青磁　張公巷窯　汝窯　南宋官窯　高麗青磁

１．研究開始当初の背景

いわゆる「北宋官窯」は、宋代陶磁の最高峰と考えられているが、未だに十分解明されたとはいえない。南宋代の葉寘の『坦斎筆衡』には「政和間、京師自置窰焼造、名曰官窰」という記文がある。また、顧文薦の『負喧雑録』には「宣政間」として同じ記文がある。北宋官窯はこれらの文献による限り、北宋末、政和（1111～1118）から宣和（1119～1125）年間に設立され、おそらくごく短期間、継続したものと思われる。それが官窯である限り、北宋の崩壊をもたらした金による攻撃、靖康の変（1127）直後に閉窯し、或いは破壊された可能性がある。

2001 年河南省汝州市において開催された汝窯に関する国際シンポジウムにおいて、清凉寺汝窯に類似した若干の青磁片が汝州市中心部（64 ㎡）から発見されたとの報告があった。2004 年にはさらに汝州市張公巷で 124 ㎡の発掘調査が行われた結果、淡灰緑色の釉色と精緻で洗練された造形を持つ相当量の青磁片が発見された。それらは張公巷窯と名付けられ、北宋官窯との関連性において世界中の研究者から注目を浴びた。周知の如く北

宋徽宗帝は自ら優れた芸術家であり、鋭い芸術的感性によって多くの美術品のコレクションを作り上げた。この徽宗の趣味が北宋官窯製品の性格に強い影響を与えたことは容易に想像される。しかし、張公巷窯が北宋官窯であるとする仮説は、現在の段階では未だに確認することは出来ない。なぜなら窯体が未だに発見されず、また窯址の地層に乱れがあるため、その活動年代を考古学的に実証することが困難であるためである。事実、一部の中国研究者は主に文献考証の上からその活動年代は金～元代まで下ると主張している。しかし、出土資料を観察する限り、造形的には北宋代の特徴を備えていると推定されるため、考古学的考察のみならず、美術史的考察を加えることによって汝州張公巷窯が北宋官窯に同定される可能性があると考え、本研究は出発した。

２．研究の目的

本研究は、河南省汝州張公巷窯が北宋官窯に同定される可能性を造形様式の比較対照という美術史的方法によって考察しようとするものである。考古学的な調査が未了の段階においてその製品の年代観を得るための有効な方法の一つと考えられる。具体的には張公巷窯出土資料を、張公巷窯と活動年代の近接する関係諸窯（河南省清凉寺汝窯、浙江省南宋官窯、12 世紀前半の高麗青磁など）の出土資料、および伝世品資料と造形様式の比較検討を行い、汝窯→張公巷窯→南宋官窯／12 世紀前半の高麗青磁という様式継承の順当性が証明されたなら、自ら張公巷窯の活動年代が北宋末であり、その結果、張公巷窯が北宋官窯と同定される可能性があると推測できる。何故なら、これら関係諸窯の活動年代は既に明らかにされており、北宋末という年代を前後から押さえることによって張公巷窯の年代が焙りだされるのである。平成 17 年の段階では発掘調査の範囲は 188 ㎡に過ぎず、出土資料は量的に十分なものではなかったが、関係資料との比較対照作業においては大きな支障はなかった。本研究の継続期間終了までには窯址の発掘調査範囲がさらに拡大され、新資料も発見され、考古学的にも張公巷窯＝北宋官窯説が実証される予定であった。仮に決定的な編年資料が出土しない場合でも、本研究による北宋末という年代観の確立は、汝州張公巷窯研究に有力な基盤を提供することが期待され、中国陶磁史研究の中で重要な意義を持つものと考える。

３．研究の方法

１）造形様式の比較対照

ここでいう造形様式とは、古陶磁の釉色・釉調、器形の構造、高台のつけ方、目跡の状態、焼成方法など、視覚的に観察し得る造形上のあらゆる特徴を指すものとする。張公巷窯青磁には官窯製品独特の造形様式である厳格端整な器形、慎重丹念な成形と施釉などから官窯製品であることは既に多くの研究者の認めるところである。異論があるのは年代観であり、北宋末説と金～元代説に分かれている。これを検討するための方法として一つは張公巷窯が影響を受けた 11 世紀末から 12 世紀初頭までの河南省清凉寺汝窯との比較があり、他方、張公巷窯が影響を与えたと考えられる 1130 年代以降の浙江省南宋官窯／12 世紀前半の高麗青磁との比較がある。この比較対照作業を通じて清凉寺汝窯→張公巷窯→南宋官窯／12 世紀前半の高麗青磁という造形様式の継承関係が順当に行われていることが解明されれば、諸窯の年代観との比較から張公巷窯の活動年代を北宋末と推定することが可能となる。

２）文献資料の考証

①中国関係

「北宋官窯」についてのほぼ同時代的な資料は、現在、南宋代『坦斎筆衡』『負喧雑録』が知られているのみで、資料的には極めて限定されている。これをさらに『金代史』『汝州史』『宋会要』など当時の基礎文献を調査して、補完資料の発見に努めるなど、文献的な考証をも重視する。

②高麗関係

1123 年の『宣和奉使高麗図経』には、当時の高麗青磁が「汝州新窯器」と類似しているとの記文がある。この「汝州新窯器」が何を指すのかについてこれまでは汝窯説が主流であったが、新たに張公巷説も取り上げなければならない。特に 12 世紀第１・四半期の高麗青磁に張公巷窯が影響を与えたか否かの検討は、張公巷窯の活動年代推定に重要な役割を果たすものである。

４．研究成果

１）汝州張公巷窯発掘調査の現況

本研究を開始した平成 17 年に、発掘当事者である河南省文物考古研究所は省単位の予算措置も取り、発掘調査範囲拡大の具体的計画を立て、その事業年度中の実施を目指していた。しかし平成 18 年、さらに国家予算も獲得しながら発掘調査地域の住居立ち退き問題が解決をみず、平成 21 年に入っても膠着状況が続き、未だに発掘調査に何らの進展が見られないのは遺憾に堪えない。

２）かかる状況においても、平成 16 年度迄の出土資料を中心に本研究は予定通り、造形様式の比較対照と文献資料の考証を進め、一定の成果を収めた。

①本研究によって 12 世紀第１・四半期の制作と推定される高麗青磁に、張公巷窯からの影響の跡が発見できたことは大きな成果といえる。それは青磁鼎形香炉、円形碟、四方委角套盒などの成形や焼成方法に特殊な強い類似性が認められたことによって推定が可能となった。

②少なくとも円形碟と四方委角套盒は高麗第 17 代仁宗王の長陵出土品の一部であり、その制作年代は仁宗没年の 1146 年を下限とするものである。さらに『金代史』『汝州史』などの考証から、北宋滅亡の 1127 年以降、少なくとも 1146 年頃迄は、汝州に官窯が継続運営されていたとは考えられず、一方、仁宗長陵出土の高麗青磁の制作年代が 12 世紀第１・四半期と推定できることから、それらの高麗青磁が 12 世紀第１・四半期に活動していた北宋官窯に影響を受けたものであり、その北宋官窯とは張公巷窯に他ならないことが推定可能となった。
但し、現在の時点でサンプル数が未だ少量のため、決定的な証拠とは言い難いが、少なくとも張公巷窯の活動年代が北宋末ではないと否定することはできない有力な証拠となっている。

③高麗青磁の編年資料との比較対照を取り上げた本研究の一部については、既に台北・故宮博物院の『北宋代の芸術シンポジウム』（2008 年）、河南省文物考古研究所編『汝窯与張公巷窯出土瓷器』(2009 年)、国内では『民族芸術学会第 100 回記念研究会』（2006 年）で発表し大きな関心を呼んだ。

④最も大きな成果としては、発掘当事者である河南省文物考古研究所の張公巷窯に対する年代観について、平成 16 年当時は金～元代説に傾いていたが、現在では北宋説に傾いてきている点で、本研究が何らかの役割を果たしたと考えられることである。

⑤本研究の母体機関である大阪市立東洋陶磁美術館においては、平成 21 年 12 月 5 日から平成 22 年 3 月 28 日まで清凉寺汝窯と汝州張公巷窯の出土陶片からなる特別展、平成 22 年 3 月 13･14 日（予定）には国際シンポジウムが開催されるなど世界で初めての海外における出土資料の紹介が実現されることになった背景にも本研究の寄与が認められる。

３）今後の課題
①最大の課題は、汝州張公巷窯のさらなる発掘調査が進展し、考古学的に北宋官窯との同定が行われることである。

②汝窯から張公巷窯を経て南宋官窯に至る「宋代官窯青磁の系譜」は、中国においてもその研究は初歩的段階に止まっている。この問題について美術史的な視点を加えた総合的で体系化された研究が実現できれば、画期的なものとなり、国際的な評価は計り知れないものとなるであろう。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 1 件）
① 小林　仁、中国出土高麗青瓷考（中国語）、中国古陶瓷学会編『中国古陶瓷研究第 14 輯』、１４巻、ｐ563-588、2008 年、査読無

〔学会発表〕（計 3 件）
① 伊藤　郁太郎、「北宋官窯」研究の最前線、民族藝術学会第 100 回記念研究例会、2006 年 3 月 4 日、大阪府大阪市
② 小林　仁、中国出土高麗青瓷考（中国語）、中国古陶瓷学会 2008 年泉州年会、2008 年 11 月 9 日、中国泉州・華僑大廈
③ 伊藤　郁太郎、An Essay on Northern Sung Guan Ware: Focusing on the Relationship between Zhanggongxiang Ware and Goryeo Ware（英語）、 開創典範－北宋的藝術与文化研討会、2007 年 2 月 8 日、国立故宮博物院（台北）

〔図書〕（計 3 件）
① 伊藤　郁太郎、国立故宮博物院（台北）、「北宋官窯試論－以張公巷窯与高麗青磁的関連性為中心」（英語・中国語）『開創典範－北宋的藝術与文化研討会論文集』、ｐ111－127（総頁 795）、2008 年
② 伊藤　郁太郎、科学出版社（北京）、「試論汝州張公巷窑的活動年代」（中国語・英語・日本語）『河南省文物考古研究所編・汝窑与張公巷窑出土瓷器』、ｐ219－239（総頁 250）、2009 年
③ 出川　哲朗、科学出版社（北京）、「汝窯水仙盆考」（中国語・英語・日本語）『河南省文物考古研究所編・汝窑与張公巷窑出土瓷器』、ｐ240－249（総頁 250）、2009 年

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）

○取得状況（計 0 件）

〔その他〕

６．研究組織

(1)研究代表者

伊藤　郁太郎（ITOH IKUTARO）
財団法人大阪市美術振興協会
大阪市立東洋陶磁美術館
学芸顧問（名誉館長）
研究者番号・40373519

(2)研究分担者

(3)連携研究者

出川　哲朗（DEGAWA TETSURO）
財団法人大阪市美術振興協会
大阪市立東洋陶磁美術館
館長（兼学芸課長）
研究者番号・50373519

野村　惠子（NOMURA　KEIKO）
財団法人大阪市美術振興協会
大阪市立東洋陶磁美術館
学芸課　主任学芸員
研究者番号・90373512

小林　仁　（KOBAYASHI　HITOSHI）
財団法人大阪市美術振興協会
大阪市立東洋陶磁美術館
学芸課　主任学芸員
研究者番号・00373522

片山　まび（KATAYAMA MABI）
東京藝術大学　美術学部　准教授
研究者番号・80393312

(4)研究協力者

［中国］

孫　新民（SUN XINMIN）
河南省文物考古研究所　所長
郭　木森（GUO MUSEN）
河南省文物考古研究所　所員
李　剛（LI GANG）
浙江省博物館　副館長
沈　岳明（SHEN YUEMING）
浙江省文物考古研究所　所員
陸　明華（LU MINGHUA）
上海博物館　陶瓷部　主任

［韓国］

鄭　良謨(ZHONG YANGMO)
韓国国立中央博物館　元館長
尹　龍二(YUNG YONGI)
明知大学　教授

［台湾］

余 佩瑾(YU PEICHING)
国立故宮博物院　器物処科長